応　機

通常、「智」をもって「愚」を使うのは順当なことである。「愚」をもって「智」を使うには命じること（強制力）による。「智」をもって「智」を使うのは義による。その道には三つある。一には「勢」、二には「位」、三には「時」、この三つの要素（すなわち、エネルギー・空間・時間）を兼ねた上で、治乱存亡の勝敗を知るのが、さらに「機」である。「機」が動いて、これを制することができないのは「哲」（道理をわきまえている）とは言えない。「機」が発生して、これを知ることができないのは「智」ではない。全てにおいて「機」というものは、人心が顕れたものであり、さらにそれは幽微（神秘的で知り難いこと）である。幽微であり、しかも天地の霊に通じており、それにより万般の気（この世に存在する全てのもののうち、もっとも根源的なエネルギー）となる「気」である。それは、予め示して人のなす事を視るものである。それ故に万法（物質的、精神的なすべての存在とその真理・法則）は人が発する気の一つに過ぎず、「機」とは本質的に、みな「生住異滅（生じ、とどまり、変化し、消滅するという四相）」の掟であり、人の盛衰を示すものである。盛衰とは何処からもたらされるのだろうかと心眼により見る時、風が起こって木葉を吹くのも全ては「生住異滅」がもたらす変化の一つであることがわかる。ただし、運と命とは体（姿・形）の気であり、時に感ずるものである。そうであれば、「生」の位相により全ての個体の生ずることを推察し、「住」の位相により全ての個体が成長することを観察し、「異」の位相により全ての個体の定まるところを推測し、「滅」の位相に因り全ての個体が変化するところを暁（さと）る。すなわち、その気は声も無く、臭いも無くして、しかもあらゆるところに存在する。このことは秘中の秘である。